氏　　名	野呂田　理恵子
学位の種類	博　士（美　術）
学位記番号	乙　第４号
学位授与日	令和３年３月15日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
論文題目	社会包摂のためのアートワークショップ ～日本におけるアート＆ヘルス分野の進展に向けて～
審査委員	主査　女子美術大学大学院教授　山野　雅之
	副査　女子美術大学大学院教授　横山　勝樹
	東京学芸大学　准教授　笠原　広一

内容の要旨

本論文は、日本における現代の新しい社会課題である「社会的孤立」の状況を踏まえ、「社会包摂」（多様な人たちが参加し、違いを認め合い、誰もがよりよく生きるための社会づくり）を目的とするアートワークショップ（以下、AWS）のフレームワークを提案するものである。『次世代ユニバーサルアートイベント９＋３＋３』として結実させたそのフレームワークにおいて、担い手としてのファシリテーション能力を身につけたアーティスト像を提示することで、「アート＆ヘルス分野」という新しく活躍する場を創造する可能性を開いている。そのことはまた、皆が身体的、精神的、社会的に充実している健康な生活を送ることのできる社会づくりのための、人々の意識改革を進めることともなる。そこに本論文の新規性がある。

本文については６章で構成した。序章で日本における芸術分野のワークショップの変遷をレビューした後、第１章及び第２章は社会（的）包摂の歴史・制度的アプローチによる分析、第３章から第５章にかけては、筆者が取り組んできたAWSについてアクションリサーチによる分析を行った。第６章ではそれらの分析を元にアートの個人的効果・社会的効果、社会的価値を兼ね備えた次世代ユニバーサルアートイベントの骨子を提案し、プログラム『吹き出す！×フキダシ！』を例に、その信頼性についてアクションリサーチによる分析を行った。

第1章及び第2章の分析結果から、イギリスと日本における共通の課題「社会的孤立」に対応して、それぞれの政権のイニシアチブにより、社会的包摂政策が文化政策と関わりあった経緯を明らかにした。日本における制度分析の前段として、イギリスの制度分析を選んだのは、同国では1990年代後半以降、社会包摂政策及びその手段としての文化政策の四半世紀近い経験を有するためである。

近年では両政府とも文化施設（機関）による医療・福祉施設を対象とした、アーティストのアウトリーチによるAWSが推奨・実践されるようになっている。イギリスでは保健省と文化機関の政策上の融合が見られ、AWS が Arts & Health 分野のサブカテゴリー化したことも明らかにした。日本では、2018年度（平成30年度）に文化庁の新しい文化芸術推進基本方針に「本質的価値」「社会的・経済的価値」という視点が加わり、社会包摂を見据えたまちづくり・教育・福祉・医療など他分野との活動も範囲に入ったことから、それらの価値のバランスに着目し、文化芸術のアウトリーチが医療施設にもたらす社会包摂（社会的効果）の強度・範囲を、文献とインタビューにより分析した。その結果、病院内でのアートに関する事例からは、現代アートの作家による一過性のアート作品の場合はその鑑賞者に「本質的価値」を大きくもたらし、「社会的価値」は一定程度に留まる可能性がある。一方で、病院内にアートディレクターがおり、中立的な立場で集団創造的な方法によって、病院内の課題解決に取り組む場合は、「本質的価値」は弱くても（すなわちアート作品による感化力は弱くても）制作されたアート作品の「社会的価値」は非常に大きく、病院内に必要な思いやりの循環さえも起こる可能性があることを示唆していることが分かった。

第3章から第5章は、イギリス政府の社会的包摂政策の基盤となったマタラッソ指標「50 SOCIAL IMPACTS OF PARTICIPATION IN THE ARTS (参加型アートによる50の社会的効果)」を軸に、日本の社会状況と文化特性に沿う、AWSとファシリテーションの骨子の開発を試みた。

第3章では、イギリスのNHSバーミンガム子ども病院が開催したAWSの事例からプログラム・地域社会との連携の骨子と、アーティストを含めた主催者（ファシリテーター）に必要な資質と能力とそれぞれの役割、アーティストだけに求められる資質と能力を整理した。筆者の参与観察とインタビューから、ファシリテーターたちの関係は、それぞれの自主性を尊重される水平な網の目型の関係性であること、美術教育とは切り離され、制作した結果物である作品ではなく、そのプロセスにおける人々の関わり合いや、社会の一員としてのふるまいが着目された。広義での「バ（場）・ヒト（人）・コト（事）の徹底したつくり込み」が、参加者たちをその場への、そして社会への包摂へと導いていることを明らかにした。これ以降の章において見出す日本独自のAWSの骨子とファシリテーション能力と役割の下敷きとしている。

第４章では、AWS のファシリテーション能力の基礎かつ特徴といえる「柔軟な対応力」の、日本の参加者への影響を調査・確認した。その調査は、筆者が大学病院小児病棟の入院患者にほぼ一年半をかけて開催した AWS を元に実施した。各回の終了後に参与観察を元に「ダイアリー（日誌)」をつける。それを子ども入院患者の心理を加味したうえで設定した「アドバンテージノート（効果票)」に基づいて分析した。参加者の主体性を尊重した自由度が高い対応であればあるほど、参加者たちが得られる個人的効果はもとより、社会的効果が高まることを明らかにした。「入院･治療」というある種の抑圧された状況下では、参加者たちが主体的・即興的に進め、ファシリテーションはそれを促進することが理想であり、重要であることが判明した。

第５章では、アート＆ヘルス分野の特徴ともいえる異分野に渡る複数のステークホルダーたちが共にその社会的効果を確認し合えるツール〈かかわり網の目指標〉を提案した。そのツールには、イギリス経済団体が開発し、多くの国々で生活の中で活用されている「Five Ways to Wellbeing（５つのよりよく生きる方法)」をベースとする評価項目を取り入れた。そのツールの有効性に関する検証は、重篤な状況にある参加者（当事者・保護者）に、アーティストが直接会えない条件下で行われた。

作品設置前と作品設置の３カ月後に、複数の福祉施設のハウスマネージャーらに対して実施されたアンケートを基にツールを活用した検証を実施した。(音楽や演劇等と異なり時間を経ても作品が失われず、誰かが手を加えれば、その変化を視認できる)「ビジュアルアートの特性」を生かすこと、その特性を理解して直接には会えない人々同士（当事者同士、当事者―ボランティア）が関わり合える機会や存在を認識し合う機会を作ることができたことで、福祉施設内の社会的効果が確認でき、本ツールが有効であることを示せた。このツールがあることで、アート・福祉などの専門分野を問わず誰もが、当事者・保護者が以前と比較して社会的に包摂されたことを評価できるようになったと言える。

第６章では、第３章から第５章までのファシリテーション及びその理想とする方向性、評価手法を踏まえて、日本における「社会的孤立」の深刻化と、ハイコンテクスト文化である日本の特性に対応したインクルーシブを目的とする AWS のフレームワークを提案した。このインクルーシブな AWS には一般的なワークショップにある構造性やその教育的効果が含まれている。これにより、包摂する・される感覚を参加者にもたらす AWS のハンドブック『次世代ユニバーサルアートイベントのつくり方９＋３＋３』を作成した。その具体例としてのプログラム『吹き出す！×フキダシ！』が３回実施された。

これらの考察・分析・制作・検証により、日本の文化に則した、かつ、誰もがインクルーシブな社会を体感できる、「社会的包摂を目的とするアートワークショップ」が開発可能であることを示すことができた。一般的な造形・鑑賞ワークショップとは異なる、広義での「バ（場）・ヒト（人）・コト（事）の徹底したつくり込み」が、主催者・参加者全員の身体性・協働性・即興性・柔軟性を導き、関係の水平性・自己原因性感覚・集団的な統合感覚をつくりだす。個々の創造性を発揮して自己表現ができることに重きを置く一般的なAWSに対して、本AWSでは互いの創造性を共有し、交換し合い、楽しみながら、一体感・連帯感・包摂感を味わうことができる。アートならではの創造性を軸にするからこそ、様々なリミットを越えた「まだ誰も体験したことのないインクルーシブな社会」を短時間で体感できるのである。これらが、日本のアート＆ヘルス分野のAWSにおける進展の鍵になると考えられる。

以上により、日本の「社会的孤立」の緩和に資する社会的効果の高いAWSの普及を目的に、医療・福祉分野からコミュニティまで、幅広い対象者と共に活用できるAWSのフレームワークを示すことができた。文化芸術と医療・福祉が掛け合わされる「アート＆ヘルス分野」において、医療・福祉施設などからアウトリーチを依頼され、専門性の高いファシリテーション能力を身につけたアーティスト達が活躍の場を飛躍的に広げることができる。

「社会は個人の集合体である」― 個人が他者をポジティブに受け入れるには、その人自身が同質ではない人々との間で、あたたかくポジティブに受け入れ、受け入れられる経験が何度も必要となる。そうした経験の積み重ねがその人自身の人生の豊かさをもたらし、社会の成熟にもつながっていくことを、多くの人々に共有されることを願っている。そして、幅広のアートがその一翼を担えることを、本論文を通して多くの人々に伝えたい。

審査の結果の要旨

論文審査までの過程

野呂田理恵子氏は、平成19年にイギリス、バーミンガム・シティ大学・バーミンガム・アート・デザイン学院修士課程を修了し、その時にイギリスにおけるソーシャルインクルージョンの考え方との出会いがあった。

平成24年4月から、女子美術大学 アート・デザイン表現学科ヒーリング表現領域 特任准教授としてアートを活用した社会包摂やアートワークショップを軸とした授業で学生の指導に当たっている。

その間、社会包摂、アートワークショップなどをキーワードとした研究の論文、研究報告をアートミーツケア学会や、本学の研究紀要に投稿、発表している。

野呂田氏の博士論文審査は、まず令和2年12月3日に予備審査申請書類が提出され、12月28日にコロナ禍のためオンラインによる予備審査を行ない、上記審査委員から、引用文献の表記方法、論文構成、論理的な記述方法について幾つかの修正点が指摘された。また、研究内容の新規性についても確認をおこなった。指摘事項についての加筆、修正が適切になされているかを確認した後、令和3年2月12日に本論文が提出された。

令和3年2月24日午前10時からオンラインによる論文発表会（最終試験と公聴会を兼ねる）を実施した後、同日、審査委員による合否判定審査をおこなった。

論文審査

本論文は、広い範囲の社会の文脈、特にソーシャルインクルージョンの分野で、どのようにアートが果たしうる役割があるのか、それが社会的な仕組として、日本においてどのような可能性があるのか、多文化共生社会としての長い歴史を持つイギリスの社会包摂を調査、分析した上で、「日本社会」でのアートワークショップの在り方を考察している。

そしてイギリス政府の社会的包摂政策の基盤となったマタラッソ指標「50 social impacts of participation in the arts（参加型アートによる50の社会的効果）」の分析を軸に、日本の社会状況、文化特性に沿うアートワークショップとファシリテーションの骨子の開発を試みている。

論文からは、日本における一般的な美術教育の考えとは切り離し、作品そのものではなく、そのプロセスにおける人々の関わり合いに着目したワークショップを試みたものとして社会的な意味を持ったアートワークショップの開発が読み取れる。

具体的には、日本における「社会的孤立」の深刻化と、日本の特性であるハイコンテクスト文化（言語以外の意味、ボディーランゲージ、阿吽の呼吸、暗黙の了解、場の空気を読むなどに重きを置く文化）に対応したインクルーシブを目的とするアートワークショップが提案されている。日本の文化に則した、かつ、日本で誰もがインクルーシブな社会を体感できる、「社会包摂を目的とするアートワークショップ」を提案する事の意味を問題提起しているとも言える。

非常に多岐にわたるアート表現一つ一つの間に位置する問題を明らかにする、そのことに対して答えていくには、アートが関連することが様々ある中で、それらをつなぐ大きな橋を架けることを誰かが成さねばならない。そうした分野に意欲的に挑戦した研究と言える。

日本に於けるアートと異分野の間に存在する大きな距離に対しての橋渡しをするフレーム、そこに今後は、具体的な中身を入れていくための研究が進められる必要もある。

本研究で、アート&ヘルスとアートワークショップの関係と構造を浮かび上がらせたことで、今後この分野の研究が加速していくことが期待される。

イギリスで、ブレア首相政権下の時期に、社会包摂と融合したコミュニティーアートの運動、参加型プロジェクトが市民間に定着していった。そして医療福祉やアート&ヘルス

との関係性も高まっていった。それに対して日本では、まだ上手く機能していない状況にあり、本研究は今後、日本でのアート&ヘルスとアートワークショップの融合を目指す為の重要な嚆矢となる研究テーマであると言える。

今後もアートの拡張につながるフレームワークを作ることで、更に実践的な研究を進めていくことが望まれる。アートは直感を持って社会的な価値観を変える力を持っている。直感的に強く訴える方法をアートワークショップとして追求していくことが今後の研究の課題である。

日本のアート&ヘルス分野におけるアートワークショップの進展の鍵になる提案をし、今後の展望につなげていく、そうしたところに本論文の新規性が認められる。

以上の点から、本研究は研究目的の新規性、研究方法・調査方法の妥当性、論理性、研究内容の社会的貢献性、独創性から総合的に判断して、博士論文として十分な内容に到達していると判断され、合格を認めることに審査委員全員一致の見解を得た。